# 覇者召喚

灰色兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
覇者召喚

【Ｎコード】
Ｎ５６９８Ｃ

【作者名】
灰色兎

【あらすじ】
始まりは暗い地下室、彼はこの世界に召喚されました…

## ｓｔｏｒｙ０…序章

気付けばいつも手遅れだった

「よぉ、あんたを殺しに来てやったぜ」

二度と失敗しないと何度も誓った

「…」

誓うことだけは何度もできた

「あばよ、女神様」

誓うことだけは何度も許された

ザシュッッ

誓わなければ許されなかった

「…あっけねぇなぁ…おい」

## story1…召喚

「…我は汝の主なり、我に背くことあらじ」

どこかの地下室、部屋は長方形に広く、天井がやけに高い。
辺りは暗く、灯りは部屋の壁に下がっている蝋燭のみ。

「我、代償を汝に与える、王族の血、捧げ賜る」

部屋の中心には大きな魔法陣が描かれていた。
その魔法陣の中心には少女が1人、至る所から血を流し倒れている。

「汝、我が血の契約の元、姿を現すべし」

魔法陣から数歩ほど離れたところに、両手を前につきだし黒いローブを着、フードを深く被った男。
先ほどから呪文を唱えているのは、どうやら彼のようだ。
その隣には背の低い小太りな黒いローブを着た男。彼はただただ傍観しているだけだ。
この2人の男の後ろには、同じく黒いローブを着た者達が立っている。

魔法陣が光り出す。中心に倒れている少女はその光に包まれる。

「我、女神の名において命ずる。我が契約の元、出でよ！世界を統べる覇者よ！」

その呪文の言葉に呼応し、魔法陣から光が塔のように縦に伸びた。

あるはずもない風が吹き荒れる。
小太りの男はにやにやとその様を眺める。
顔を隠した男も、わずかに見える口元が笑っている。

光が徐々に収まっていく。
黒いローブを着た彼等は、ようやく目の前が見えるようになった。

魔法陣の中心には人影が2つ在った。

一つは、倒れている少女。
もう一つは床に座り、じーっとを睨みつけている男。

「コイツが…覇者…」

小太りの男が呟いた。

## story2…邪神

「…おいおっさん」

魔法陣の中心にいる男が口を開いた。
すでに魔法陣の光はやや残るものの、ほんのりとその周辺を照らす程度だったため、
中心にいる男の表情も見て取れた。

「こ、コイツ喋れるのか！？おい！ジュリアス！！」

小太りの男は驚きの表情で叫び隣の顔を隠した男に訊いた。

「…存じ上げません。しかし彼が喋ったと言うことは、そういうコトなのでしょう」

ジュリアスと呼ばれた、顔を隠した男は静かに言った。彼も驚いているようだ。

「何ごちゃごちゃ言ってやがる、いいかおっさん」

「おっさんではない！我が輩は貴様の主のグロウだ！」

小太りの男はそう名乗った。

魔法陣の中心にいる男は、静かに立ち上がり、グロウに近寄った。

男の容姿は無造作に伸ばした黒髪、目は緋色のように赤く、肌は緑色の鱗に覆われている。
服はなんともめずらしい恰好だった。神聖的なものと言われればそうとも見れるものだ。

「へぇー、主ね。アンタが？ははっ」

男は嘲笑し、グロウとの距離をゆっくり縮める。

「そ、そうだ。我が輩は貴様の主だ。跪けい！」

近寄ってくる男に、グロウは焦り、少し後さずりをする。
ジュリアスはグロウに少し距離を取り、近づいてくる男の様子を伺うように見つめていた。

「跪く？俺が？アンタに？…くっはははは！笑っちゃうねぇ～？」

「な、何だと！！貴様我が輩を嘲笑うか！！？」

男とグロウの距離が数センチに縮まった。
男はグロウを見下ろし、にやにやと笑っている。

「貴様！！主を見下すか！？！！無礼も…」

グロウの言葉は、男の右手によって制された。
男の右手の長く鋭い爪が、グロウの額に突き刺さっている。

「ぐ…バ、バカな…そんな…」

グロウは僅かに残るかすかな意識で、呻いた。
男は右手をグロウの額から引き抜く。
その刹那、額からプシューッと血が噴き出す。
ドサッと倒れるグロウ。意識はもう無かった。

グロウの額から流れる血が、床にゆっくりと模様を描くように広がる。

「俺の主なんかいねぇよ、バーカ」

男は右手の血を拭い、長い爪を引っ込めた。
そして大声で、高らかに叫んだ。

「俺は、邪神ケツァルコアトル様だ！！」

## story3…契約

蝋燭の火が灯る暗い地下室。
緑の鱗に緋色の目の男、邪神ケツァルコアトルは静かに辺りを見回した。
黒いローブを着ている者達は、目の前の亡骸のにたじろいている。けれど誰1人逃げ出してはいなかった。わずかに入口近くに移動した者もいたが、
誰も地上に上がった者はいなかった。

「見事なものです。堂々と殺人を行うその度胸。あなたはやはり覇者ですね」

パチパチと軽い拍手をしながらジュリアスは邪神に向かって微笑んだ。
邪神はうさんくさそうにジュリアスを見て、

「なんだよてめぇ」

と悪態をついた。
ジュリアスは拍手を止め、邪神の足下に倒れている亡骸を見た。

「彼は主ではないですよ、ええ、本当に」

ジュリアスはまだ微笑んだままだった。

「彼の野望はあなたを支配し、世界征服だったんですよ。
覇者であるアナタのその強大な力でね」
邪神はいかがわしそうにジュリアスを見る。
「ですけれどね、その野望を叶えるのは彼じゃない。
そう、私なんですよ。私があなたの主なのです。
主の契約に使ったのは、彼の血ではなく私の血。
そう、彼は自分が主になると思い込んでいたが、実際契約を交わしていたのは私なんですよ！」
ジュリアスの声のトーンが上がってくる。
「なんて愚かなグロウ！私の思い通りに動いていたなんて夢にも思わなかったでしょう！
ああ、可哀想に。今頃あの世で己の死に首をかしげているでしょう！あっはっは…」
「…くっはっはっは！！あ～っはっはっは！！」
高らかに笑い出したのは、ジュリアスではなかった。
「あ～っはっはっは！！おっかし～～！！アンタも所詮このおっさんと同じレベルか？」
邪神は足下の亡骸を軽く蹴り、高らかに笑っている。

「…何がおかしい？」

ジュリアスは大笑いしている邪神に、怪訝そうに訊く。

「アンタが主？あ～っはっはっは！！！バカみてぇに語っちゃって！くっはっは！！」

邪神はまだ笑いが収まらない。

ジュリアスは腹を立て始めた。

「何故笑うか！？私はお前の主だ！これは契約によって絶対だ！！」

その言葉を聞いて邪神はますます笑い出す。

「おい！何がおかしい！？」

「じゃあよ、一応訊くケドよ、契約ってなんだ？」

邪神は笑いをこらえながら、かろうじて訊いた。

ジュリアスはイライラしながら答える。

「世界を司る女神の秩序に基づいた契約だ。この世界が在る限りこの契約は絶対だ。

　覇者召喚魔法には、選ばれし王族の血と、主になる者の血を代償とし、契約する！

　こんなことは契約の基本だろうが！！」

「だ～っっっはっはっはっは！！！」

ますます笑いが止まらない邪神。

ジュリアスは口調がどんどん変わっていく。

「何がおかしいのだ！！」

「何がおかしいって？」

邪神はそう言い終わる間もなく、ジュリアスとの間合いを詰めていた。

「アンタが契約したってことがさ」

右手の爪を鋭く光らせ、狙いをジュリアスの額に定めていた。
ジュリアスは間一髪で気付き、頭を右にズラし邪神の攻撃をぎりぎり交わすことに成功した。
しかし、かすった所から血が細く流れ出ていた。
ジュリアスは慌てて邪神から距離をとる。

「もしお前が主だったら、下僕の俺は攻撃できないはずだよなぁ？」

邪神はにやにやと不敵に笑う。

「バ…バカな…。契約は確かに……」

ジュリアスは戸惑いを隠せなかった。
血に流れ出ている所に手を当て、ますます混乱している。

「お前の契約は確かに成立していたかもしれない。けどな…」

邪神はニヤリと笑った。

「その契約の秩序を守る“女神”は、さっき俺が殺したばかりだぜ！！ひゃ～っはっはっはぁ！！！」

## story4…静止

「そう！“女神”は俺が殺したッ！！だから俺は自由だッ！！あっはははは！！」

邪神は高らかに笑い続ける。

高揚感を抑えきれず、ただただ笑い、それを満たす。

「バカな…、そんな…」

ジュリアスはますます混乱している。

頭を抱え、状況を整理しようと必死に思考を働かせている。

そして状況を理解した時、ジュリアスに過ぎったのは恐怖の色。

「…」

邪神は呆然と立ちすくむジュリアスを見て、さらに笑った。

「あっっはははは！！！なんだよその豆鉄砲喰らった顔は！！ウケるぜあっっはははは！！！」

邪神の笑い声が暗い地下室に響き渡る。

「…っ。力ずくで従ってもらう！！」

ジュリアスが額に血管を浮かべ、邪神にそう怒鳴った。

後ろに控えていた黒ローブを着た者達も、ぞろぞろと邪神を大きく取り囲む。

ジュリアスが両手を前につきだし、構えるの見て黒ローブの者達も同じように構えた。

「何だ何だ？攻撃ってか？っははははは！！」

邪神はまだ高らかに笑い続けている。
その嘲笑う邪神の態度に、ジュリアスは先ほどから怒りが絶えない。

「紅蓮の灯（ともしび）をその身に灯さん！！火炎（ファイヤー）！！」

ジュリアスが唱えるのに合わせて、他の者達も魔法を繰り出す。
一斉に魔法の重ね掛けで威力が増幅した炎が、邪神を包み込み盛大に燃え上がる。

「…やったか…？」

ジュリアスが燃えさかる炎の中を、目をこらして覗く。
自分の出した炎のせいで、邪神の姿が見えないのだ。
しかし、これだけの威力の炎で、生きているハズがない。
ジュリアスはにやっと笑ったその時、

「あー暑い暑い」

ジュリアスの背後から声がした。
ジュリアスは振り返ろうとしたが、振り返ることができなかった。
邪神の鋭い爪の切っ先が、自分の首筋を正確に指していたからだ。

「なっ…なぜっ……」

「何故って？そりゃあお前、俺がケツァルコアトル様だからよ。あんな魔法たやすくかわせるね」

にやにやと笑いを浮かべながら答える。

邪神は、魔法が発動する前に円の外に出ていたのだった。

「はは…は。さ、さすが覇者だ…。速さも比べものにならない…な」

ジュリアスは首筋に冷や汗をかきながら、じっとしている。

「っはっはっは！…じゃ、そゆことで…」

「待ちなさい」

どこからともなく、この場に似合わない澄んだ声がした。

凛とした、威勢の良い声が地下室に静かに響く。

その場にいた全員が、声のする方を見た。

少女が立っていた。

その声の主は、魔法陣の中心で倒れていたハズの少女だった。

## story5…女神

少女はほんのりまだ輝きを保っている魔法陣の中心で、
邪神達の方を真っ直ぐに見つめていた。

「な…、なんで…」

生きているのだ？

ジュリアスはそう呟いた。

少女には血の跡は残っているものの、流れ出てはいなかった。
少女は邪神に向かってもう一度言う。

「待ちなさい」

「あ？」

邪神はジュリアスの首筋に爪を当てたまま、少女の方をうっとしそうに見る。
そして驚いたというように、目を見開いた

「殺してはならないと言っているのです」

「…っはは、ホントしっつこいヤツ。追っかけてきやがったのか」

邪神は空笑いをしながら少女に向かって言う。
ジュリアスとその周りの黒ローブの者達は、まるで状況をつかめない。

「なんでてめーが此処にいるのか、訊きたいなっと」

邪神はジュリアスを右手で思いっきりはたき、どかした。
ジュリアスは避ける間もなく凄い速さで左に飛ばされる。
壁にどんっとぶつかり、ガハッゴホッとむせている。

「さて、どうしてでしょう？」

少女は頬に右手の人差し指を当て、微笑む。

「…ま、別に関係ないか。そんなの」

邪神は言い終える前に少女の前に移動し、右手の切っ先の狙いを定めていた。
少女は身動一つしない。静かに邪神を見据えている。

「また殺してやるよ、女神様」

邪神の右手が無造作に動く。
狙いは目の前の少女の首筋。急所一発狙い。
それでも少女は微動だにしない。
不敵に邪神を見て、微笑んでいた。

カキンッ

「なっっ…！！」

邪神が少女から、はねのけた。

いや、跳ね返された。

少女は傷一つなく、ただそこに立っている。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5698c/

覇者召喚

2010年10月8日15時14分発行